

「古稀記念同級会」昭和36年電気卒 横浜に集う

『人生七十古来稀』盛唐の詩人杜甫の表現だが、この歳まで届かないことが「稀」という現代解釈にでもなるのか。同級生43名、惜しまれる早逝5名にして70歳生存率が88%の我々E36は平成24年10月25日～26日横浜みなとみらいにおいて『古稀記念同級会』を開催した。今回の出席者27名出席率は71%であった。

我々E36同級会はフルコース仕立てである。オードブルは平成24年10月25日正午の京急汐入駅から始まる。

横須賀在住の川村君の計らいで米第七艦隊の横須賀軍港を遊覧後、記念艦三笠を訪れ司馬遼太郎「坂の上の雲」に思いを馳せ、ドブ板通りを散策しながらメンデッシュ会場である横浜万葉倶楽部への到着となる。

万葉倶楽部で先ずは巷の余燼を気持ちよく湯に流して宴会場へ。『恋なのか？医者の見立ては不整脈』級友との出会いが甘酸っぱい心を引き起こしてくれるようだ。

やがて司会の声に物故者の生前を偲び黙祷を捧げ、校歌の斉唱となる。丸山長老の開会挨拶、我々がマドンナ平澤さんの近況を聞くころには会もいつしかほぐれて行く。

各自の近況報告に面白おかしいボケ突っ込み、合いの手が入る。古稀とは言え高度成長期を牽引した武者たちその後の活躍、新たな才能開花の話は興味深くまた我がことのように誇らしい気持ちが湧くのもムベなるかなである。

続いて当会名物川柳コンペが始まる。今回の最優秀句は冒頭に掲げた句で詠者は小林伸雄君であった。青春が甦る古稀同級会と我々の現況を重ね詠む秀作である。

酒も回る頃には司会も交替、カラオケに合唱、詩吟有段者丸山会長の朗々たる吟詠の見事さに暫し聞き惚れる一幕も。飲み歌い尽きぬ会話にも疲れを知らずそのまま部屋に土俵を移して深夜に及び親交を温めたのであった。

昨夜の余韻冷めやらぬ面々に提供されるデザートは横浜市内の散策である。ガイドは横浜在住の杉本・平賀両君が当たる。古き日本の姿を思い起こさせる海外移住資料館、赤レンガ倉庫の佇まい、大棧橋埠頭から横浜港内クルーズを経て氷川丸へと回り、中華街で昼食となる。

元氣者川村君による絶妙な場の盛り上げに過ぎる時間を忘れ、二日間にわたる想いを惜しみつつ再会を期して散会した。

ここで我がE36同級会の幹事団について特筆せねばなるまい。幹事団は夫々に役割あり、二年程前から構想シラフプランを級友のメールアドレスへ紹介し意見を募っている。

そのプランを一つひとつ事前に実地踏破することによって計画の練り上げを行ってきた。横須賀散策は勿論、クルーズや横浜逍遙、さらには宴会場メニューや最終日の昼食に至るまで律儀に“実食”踏破したのである。

なかなか大変なご苦労と思いきやどっこい、どうやら同級会を肴に何度となく呑みニュケーション機会を楽しんだのが真相で、同級会を二年弱に亘り心底味わったのは他ならぬ幹事たちであったようだ。

今を謳歌する我がE36に幸あらんことを祈念して筆をおく。(完) (E36 高山紘一記)

